特223
828

0040672000

0040672-000

特２２３－８２８

現代世相と国民教育の根本義

長田新・講述

名古屋文教協会

昭和７

AHA

828

現代女和と国民教育の根本義

名古屋文化協会

廣島大學教授　長田新先生講述

現代世相と國民教育の根本義

（講演改造の原理及び小學教育の本質に關しての講演）

名古屋文教協會

特223
828

廣島大學教授　長田　新先生講述

現代世相と國民教育の根本義

（社會改造の原理及び
小學教育の本質としての教育）

名古屋文教協會

昭和七年一月
帝國圖書館

344-164

序

「文化を動かすところの最大なるものは教育である」これは哲人ナトルプの言でありますが、文化の進歩と共に、教育の位置は愈々高まり、人間生活を司る政治、經濟、教育の三大分野においてその最大なるものは勿論教育であると今日ではせらるゝに到つたのであります。

今日の世界があげて思想の轉換期に際會し、政治、思想、經濟の三大國難は我國のみならず、世界の各國を共にその激浪の中に投げ込んでブルジョア、プロレタリアを問はず戰々兢々を余儀なくされて居ります。

如何してかゝる時代を出現したか、斯くして此將來が如何になりゆくか、いま我々は何をなすべきか、此等の問題は今日の我等に於ては實に大いなる問題でありますが、之に最後の決定を與ふるものは勿論教育の外はありません。此時にあたつて、我日本のもつ最高權威、長田新先生は、十余年に渡る畢生の研究を提げて、一日の講演に大獅子吼されたのが即ち本書であります。

「現代の世相と國民教育の根本義」とはその日揚げられた演題でありますが、之を「小學教育の本質としての教育」また「社會改造の原理としての教育」と書きかへていゝ、とは先生自らの講話中の御言葉でありました。以ていかにこの講話が、人間生活の根本に觸れ、人類社會の奥底に徹せるものであるかの一端を窺ひ得るのであります。

本會は、いま非常に事務多端また講演會度毎にその記錄を印刷する煩とその例を避けんため、此

度の印行は殊に躊躇されたのであります。がかくも偉大なる教育學說、必ず將來の日本及び世界の教育改革の根抵たるべきこの說をこのまゝ、暗に殘さんは、あまりにも遺憾との意見多く、且つその日の聽講者よりも「今回のは是非印刷されたし」とか、また遠隔の地々に折柄の豪雨にて參會されなかつた方々よりは、「せめて印刷にして頒たれるやう」との書面を受くること二三に止まず。遂に決行するに到りました。自然の攝理また不思議と云ふの外なく本會また之に服從してまことに光榮を感ずるものであります。

なほ、此書に、名古屋控訴院長立石先生の譯になる、高名なるロングフエローの「人生の詩」を載せ得たるは、讀者と共に深く感謝すべきところと存じます。

終りに、本書の成るにあたつて、直接間接種々斡旋の勞を吝まずとつて下すつた當市視學の方達校長會の方達、また厚意をもつて速記の任をはたして下さつた抑生尊兄に對し、こゝにあつく感謝を申上げるものであります。

昭和七年八月廿日

名古屋文教協會識

現代世相と國民教育の根本義

（社會改良の原理及び小學教育の本質として教育）

長田　新先生講述

目　次

一、現代社會の側面觀……一
二、現代教育と改造の叫び……九
三、基礎教育の正しい認識……一八
（小學教育に對する理解）

四、人間教育の根本義……二五
1、人生を形成する印象……二五
2、生活開展を支配する意識……三一
3、本質教育……三八
4、統一ある生成發展の人格……四二
5、結語……五〇
附錄　ロングフエローの詩……五一
跋……五七

現代世相と國民教育の根本義

（社會改造の原理及び
小學教育の本質として教育）

長田新先生講述

一、現代社會の側面觀

本日は、私の眼に映じた現代の世相と申しますかまたは情勢と申しますか、ともあれ現代社會の觀察から出發して、吾々が平素携つて居るところの教育、教化の問題について、いさゝか感ずるところを申上げて見たいと思ふのであります。

今から凡そ卅年ばかり前、オーストリーにノルドーといふ有名な醫學者があつたのであります。この醫學者は吾々人体の脈をとる術にたけて居たばかりではなくて、社會の病症といふものを診斷する術にも長じて居つたのか『文明の墮落』といふ一册の書物を著して世の識者に謂はゞ驚異の眼をみはらせたのであります。

このノルドーが『文明の墮落』の中で言つてをることは、『産業革命以後、いろ〳〵の病的な現

象が個々人の心にも、一般社會の上にも現はれて來た。即ち產業革命に伴ふところの諸種の社會的經濟的機構が、人類の神經にいろ〳〵な影響を及ぼし、その影響によつて近代人の神經に樣々な病的の徵候を生じて來た。これを名づけて『神經衰弱』と云ふ。即ち人類の文化は將に神經衰弱の一つの世紀を現出しやうとして居るのである』斯ういふやうな趣旨で一卷の著作は詳論されて居たのであります。私は當時まだ青年といはんよりは少年といふべきものでありましたが、その頃この書物を讀んで、なるほどこれは現代社會と我々に與へた一つの大きい警鐘であると云ふやうな感を深く致したのであります。

その後、世界戰爭といふものが起り、これがまた人類文化の上に、更に一つの大きい紀元を劃したともいふべきか。その世界戰爭以後の、世の有樣を見れば、ノルドーによつて指摘されたところの病的の徵候といふものが、いよ〳〵深刻に現はれて來た事實を見るのであります。

また、最近シュペングラーと云ふ哲學者が『西洋文化の沒落』といふ書物を公にしたのでありますが、これなどもやはりこの邊の消息を傳へたものではなからうか、――ともあれ私は、近世の產業革命がまづ吾々の歷史を動かし、また先般の世界戰爭が人類の文化に一つの大いなるエポックを形造つたものではあるまいか、と云ふ觀察をもつものであります。

私が最初ヨーロッパ、アメリカへ參つたのは一九二一年から二年、世界戰爭の終つて暫くした

頃でありました、それから更に七、八年を經て再びあちらの土を踏んだのでありますが、その七、八年の間隔をおいて、彼の地へわたつて、彼の地の社會の移り變りの有樣を比較的に觀察をする好機會を私はもつたのでありますが、今その觀察の中から、こゝに挿話として、今日の世相を偲ぶよすがの一、二を申上げますならば――二度目に參つた時は、あちらの國の踊りの趣きなども可成りに變つて居つたのであります。と申しますのは、その道の人の批評によれば、昔は、――世界戰爭の直後もまたさうであつたが、――紳士淑女が踊るのにはもう少し品格があつて、古典的な香りといふものがなか〳〵にあつた。ところが最近の踊りを見ると、どうも官能的と云ふか否寧ろ感覺的といふべきか、大分昔のものとは違つて來た。なぜ申して、昔の踊りといふもの――趣き、その古典的な輝きを慕ふやうな話を、私はしば〳〵聞いたのであります。なるほど私などが見ても、この前の時に見た踊りと、今度見る踊りとの間には、可なりの隔たりを感ずべく余儀なくされたのでありました。

またこれも、世相を語る一つの材料と思ふのでありますが、例へばオペラや歌劇といふ風なものを見ても――。こゝにもまた頽廢的な時代の勢ひといふものゝ、爭ふべからざる勢ひを以て流れてゐるのを見るのであります。此オペラといふものは、吾々日本人の考へるところと、ドイツ人などの考へるところとは非常に隔りがあつて、吾々がオペラといへばすぐどこか京阪地方にある田舍の

芝居を聯想するのでありますが、さういふ風なものでは全くなく、殊にドイツ民族が味はふところの歌劇は、おもにワグネルの作品などのやうで、人もよく知る如く極めて宗教的な、しかも彼れの宗教は、初めは著しく新教的であつたのが、年と共に舊教的になつて　極めて嚴肅な道德的なものを根底にもつところの歌劇であります。ですからドイツ民族が生命の糧として味はふところのオペラといふものは、非常な精神的な若しくは宗教味の横溢したところの藝術であります。ところがそのワグネルが書いたところの精神的、宗教的な歌劇を、民衆は、だん〳〵と味はふ力を失つて來たこれが最近のヨーロッパ、或はドイツの現狀であります。

そこで識者は『わがドイツ民族の精神の糧として非常な力を有つてゐたワグネルのオペラも、もうわが祖國の人達は、味はふ力を失つた。悲しいことだがこれからは、極くモダーンな現代的の軟らかな弱いものを挿んで行かなければならない。――かうして將來の我獨逸の歌劇といふものはどうなつてゆくのだらう』などと云つてゐるのでありました。

しかもアメリカに生れて成長したところのジャズといふ風なものは、音樂の王國といつてよいドイツとか、或はウキーンといふやうなところへさへも急潮の如き勢ひを以て押寄せて居て、いくら識者が眉をひそめても、その押寄せてくる勢ひといふものは恰も破竹の如きもので、いかんともいたし方がない。――かういふ事實を至るところに見受けたのであります。

まだあります。これはやゝ言語學的の問題になりますが、世界の人々の言語的發表などにおいても古典時代のやうな內面の力、その迫力といふものがだん〳〵弱くなつて來てゐる。言葉の發表などがだん〳〵やさしく、若しくは軟かく若しくは弱い。と云ふやうな世界になつたのであります。

亦私は、毎日學生相手に仕事をして居りますが、學生の容貌とか風采とかいふものを見ても、ここに世相といふものが誠によく現はれて居ます。無闇に長くした頭の毛は耳まで覆はれ、首つ玉のところへ行つて少し渦を卷く、そしてそれには汗も着く、油も着く、埃も着く、一体どういふ趣味なのかわからない。さういふ學生なんかゞ始終私の目につく、恰度イタリヤの畫家でも思ひ出すやうですが、かうした學生は決して大した藝術家ではない。確かにこれは亡國の徵である。若い人達の綴つた文章を讀むといふと、二行目か三行目になると、すぐ涙ぐましいといふ風なことを書いてゐる。しかもそれが低級なセンチメンタリズムだから困る。また一寸スポーツなんか見てもすぐ氣がつくが、誠に醜き聞きにくき彌次がしきりに耳をつく、そして負けるとその選手は直ぐ泣く。誠にどうも不思議な現象である。勝負をするなら尋常にやらなければならぬ。吾々の祖先は尋常に勝負をしたが、負けて泣くといふやうなことはあんまりなかつたろうと思ふ。穢い彌次をうんと飛ばして負けたら運動場で泣くなんて、これは一体どういふ藝當であるのか、吾々は年をとつた故か聊か青年の心理を解するに苦しむのであります。又青年の雄辯大會とか何んとかいふものを覗いて見

ても、――私も實は昨年あたりから大學の學友會の講演部といふものを引受けて居るのでありますが、そんな關係上青年學生の辯舌の會に引張出される機會がよくあつて其辯舌會場に現はれた青年の動向といふものを、昨年あたりから具さに觀察する機會をもつのでありますが、實に愁歎の限りであります。話を聞きに集つて居りながら聞くのではなくて彌次る、一体これは何んのことであるか私は學生講演會の淨化運動といふことを廣島で始めて居りますが、とも角グランドといはず講演會場といはず、青年の心の動きと云ふものは誠に不思議千萬といふ外はないのであります。

これは我々のことですが、學校を卒業して奉職しました。校長室に呼ばれて、校長から辭令といふものをつきつけふれ、讀んで見る。――『はゝァ自分の俸給は四十五圓か』これは明治四十年代のことであります。高等師範を出て或師範學校へ奉職をした。俸給つていふものは幾らか實は知らなかつた、大抵のものは知らなかつた。それから暫くしたところがまた事務室へ呼ばれた。封筒の中へ何か入れてよこした『何んですか』と職員に聞いたところが『それは旅費です』といふ。『これからどこかへ行くんですか』『いや學校を卒業して四月御赴任になつたその赴任の旅費です』『旅費といふものを貰つていゝのですか』『貰つてもいゝんです』『はゝァこれは學校を卒業して赴任すると旅費といふものが貰へるんだなァ』といふことを吾々は初めて知つて、些か驚異の感に打たれた。ところが今日は之等の待遇問題で先方の學校長と膝詰談判をする或はそこまで行かなく

とも手紙の膝詰談判だ。『もうせめて二圓あげてくれないと、他に考へるところがある――』といふ。だがまァ結局行くことになつて赴任旅費を貰つた。見たところ十二圓五十錢足らかつた、計算すると――。これは怪しからぬそも〳〵赴任の旅費といふものは斯ういふ計算法があつてそして計算すべきもの、その表に照らすと十二圓五十錢足らぬ。これは自分の權利だから取らねばならぬ――。そんなことがあつたといふんじやないが、これに類似したやうな世の有樣になつてをるといふことを、私は拒み難いのではないかと思ふのであります。

勿論、その頃と今日とは社會のすべてが、隨分と變つて來ました。殊に人々が經濟生活の窮迫を感ずることは一通りではありません。何故でありませうか。……私はこゝに現代世相の一端を申上げて、現下日本の正面の觀察を避け來てました。が政治界に、經濟界に、宗教界に、教育界にその他全般にわたつて、私達が正視するにたえないやうな出來事は、實にどれ程あるでせうか、また耳を蔽はねばならぬやうなことがどれ程多くあるでせうか。――先般は五・一五事件と云ふようなものもありました。――それは皆樣があまりによく御承知のことですから、私の申上げるまでもないと思つたからであります。

これが人間社會のあるべき狀態でありませうか。もしそれ最も冷靜なる見地に立つて、現代の世相を窺ふならば、人々は人生に對する非常な疑懷に陷つて居る、永遠なるものに對する信念を次第

に失つて來てゐる。人格は低下し分裂して居る。その內面生活は無政府狀態でとも言ひますか、心の支柱はごうやらなくなつてゐるかに見えてなりません。ノルドーは『神經衰弱の世紀で』あると申しましたが、私は『人格分裂の世紀』であると云ひたいと思ひます。まことになげかはしい場面をあまりにもしば〳〵見せつけられる此頃であります。

二、現代教育と改造の叫び

惟ふに、文化の普及は、それが必然的に一般化をともなひ、その一般化が惹いては文化の水準線といふものを非常に低くしてしまふのだと私は思ふのであります。われ〳〵はごうかして文化を普及させなければならない。しかし文化を普及させると、ごうも文化そのものゝ高く美しきすがたといふものがごうやら色褪せて來る。文化の普及といふ事と文化の水準線といふことは逆にくる。普及すればするほどその水準線が低くなる。これはやむを得ない一種のジレンマとも云ふべきものではありませうが。こゝに本當の精神的文化の香りの失せてゆくのを吾々は生命にも代へ難き悲恨事なりと考へるのであります。丁度昔アリストートルが政治論の中に論じてをるやうに、デモクラシー——民主主義といふものが、必然的に衆愚主義になるのであります。

そこで教育といふ仕事は、一面に於て文化の普及をはかると同時に、文化のレベルを高めて行く運動とならなければならないのであります。横の運動と同時に縱の運動とでもいひませうか、文化を普及するにつとめると同時に、文化そのものゝ高さを高くする——或は深さを深くする。この二つの方向に走るところの運動を同時に營むことが非常に必要だと私は思ふのであります。

實用主義の教育、或は一層解り易く申すならば役に立つ教育――さう云ふものが全盛を謳はれて居る今日でありますが――、此教育の根底には――、更にこれをつきつめて言へば唯物論といふものが藏されてをるのであります。かういふやうな立場に立つところの現代の學校教育は、彼の政治上のデモクラシーと共に、いはゆる共同戰線をはつて、人類の精神的の文化を危機に導くものである。と私にはさう考へられて、かうした教育の今日の流行は、また吾々をして考へさせないではゐないのであります。

今日のわが教育界には、一つの自己矛盾があるやうに私は觀察いたします。何を指さして現代の教育界に於ける自己矛盾といふか、それは只今申しました「役に立つ教育――教育といふものは役に立たなければならぬ」この相言葉のもとに殆んど日本の教育の實際界を風靡して居るものであります。しかし役に立つ教育といふものには、――私として別の道において考へて居ることもありますが、こゝではそれを例外として――、概ね二つの立場があります、實用主義若しくは唯物論といふものに根底をおいてゐるものが一つ、そして他の方面より思想善導といふことを非常に力說をする。即ち役に立つ教育の概念が一つと、この二つの概念を指します。が抑もこの二つは、その根底においてもしも矛盾を孕んでをりはせぬか。元來、思想善導といふ問題は、精神的なるもの、永遠不朽なるものを慕つて行くといふ、純粹な內面的のものであります。言葉を換へていふならば、少

なくとも一種の理想主義に立脚せねばならないものであります。だのにそれが今日の教育思想の如き唯物的教育に孜々と精進してゐては、それで果たしてその目的を達し得るであらうか、つひには破綻に陷らざるを得ないのではあるまいか。吾々は此點いはゆる役に立つ教育と、其根底に横たはつて居る唯物論――物質的利得といふ如きものを目的として居るものと相照らして、こゝに此兩者の矛盾のいかに甚だしいかを考慮する必要はありはしないか、私はかう考へるものであります。

政府はつねに產業の立國といふやうなことを唱へて居りますが、この產業立國を――、幾何學の方でいふならば、定理に對するKといふやうな意味で、教育の目的は、教育の實用化、役に立つ教育といふことになります。政府の態度としては、あまり怪しむに足らないと思ふのでありますが蓋し現代のわが國の政治機構はどんな有樣であるか、多少でもこれを知るものは、これをしてたゞ當然のことゝ言ふの他はないでありませう。元來多くの政治家といふものは、どうしても現實的なる問題、吾々の眼前に起つてきたところの問題を、ともかくも處理しなければならぬといふ、さういふ立場に立たざるを得ない故だとも言はれるのでありますが、しかし私は古來の大政治家といふものは決してさうではなかつたと思ふのであります。所謂政治家と我々と見解の分れるところは即ち此處で、彼等は所謂百年の大計どころか十年の計、いやたゞ目前のこと、たゞ其日のことに虜れて

日もこれ足らない一般の政治社會、その政治家といふもの、中から産業立國がたえず叫ばれ、それを教育の方へ應用して、役に立つ教育、即ち實用主義を主張することは、私は決して怪しむにたらないと思ひますが、しかし教育者といふものが、もしかういふ聲に和合する、若しくは迎合するとしたならば、それでいゝか。これが現下の大いなる一つの問題といはなければならないと、私は思ふのであります。

吾々教育者の立場といふものは、仕事そのもの、本質から考へても、勢ひ生きた人間の社會、眞の人間の生活、即ち永劫なるものもしくは不朽なるものを絶えず凝視してことに當る。そして何よりも先づ社會改造の立場に立脚しなければならぬ。吾々の携はる仕事といふものは、何よりも先づ社會改造——教育といふ機能は社會改造の機能である。社會改造の原理として、教育に正しき位置を與へるといふことが常に必要である。斯う私は思ふのであります。社會改造の立場に立つといふことは、先刻の言葉で申せば、文化そのもの、水準を高めて行く、もしくは深めて行くといふことにあるのであります。

そこで私共のよく聞くことは、教育の社會化といふことであります。教育を社會化しなければならないとは、もう二十年來の世界の聲であります。しかしながら、其謂ふところの社會化といふものは、如何なる立場に立つての社會化であるか。といふこゝにも一つの問題があると思ふのであり

ます。言葉を換へていふならば、順應といふところを私共は改造といふ言葉に換へなければならぬと云ふのであります。この社會に順應するのではなく、この社會を改造してゆくことでなくてはなりません。言葉を換へるならば、教育は社會への順應作用ではない、教育は社會を改造するところの作用である。改造といふ立場に立つて、教育と社會、學校と社會が結合するといふことは最も教育といふ仕事の性質から考へて、正しき態度であるのであります。

ところが主としてアメリカから來たところの、この學校の社會化、教育の社會化といふことは、寧ろ此社會に順應して行くことに過ぎないのでありますが、もし「與へられたる社會狀態に、教育といふものが協調して行かう」といふのみならば、謂はゞ没學理的な、没理想的なと云ふ謗りをまぬがれないのであります。しかしドイツにおける教育の社會化、學校の社會化といふことはアメリカのそれとは異つて、社會或は民族といふものを改造して行かう、即ち改造してゆくといふ立場に立つて學校と社會とを連鎖すべく、密接重大に考へてゐるのであります。

學校の社會化には、二つのタイプがあります。その一つはアメリカ的のもの、他の一つはドイツ的のものであります。前者における態度は、學校といふものをたゞ社會に順應さして行かうとするばかりでそこには批判的の態度はない。順應する價値がある社會なるか否やといふ價値の問題に觸れずして、ともかく社會が斯うなつてゐるから學校もそれに合はせなければならないと云ふ。これは

沒學理的であり、沒理想的である。これは學校のとるべき正當な態度ではないと私は思ひます。社會改造といふ立場、價値的な立場、理想的な立場、人類の歴史的發展における教育の位置。そして學校と社會との結合統一等といふ最も當然な、教育の立脚点、之を外にして教育の意味はない。然るに其邊の事情について吾々教育者といふものは今日どれだけの自覺をもつて居るか。といふやうなことをも私は考へざるを得ないのであります。兎も角人類の社會における教育の占むべき正しき位置といふものを、今なほ人々は自覺してゐない。私はあまりに遺憾に思ふものであります。

その邊の問題については、既にペスタロッチーの如き先覺があり、フィヒテの如き先覺があり、近くはナトルプの如き先覺がありますが、――ナトルプはこんなことを申しました。「此社會には大体三つの大きな働きがある。政治、經濟及び教育――この三大機能のうちで教育といふ機能は、その事柄（職能）の性質が精神的なものであるだけ特に理想的なものである。この精神的な理想的な教育といふ機能によつて社會といふものが基礎づけられないならば、さういふ社會は吾々が過ぎし五千年の間もつた社會のやうに、不健全な、本當の内面的な支柱をもたないところの、歪められた危險を孕んだ社會となる。來るべき社會、將來の人類の社會においては、永遠なるもの即ち精神が、即ち教育が支柱となるやうな、さういふ社會機構でなければならない」

しかしナトルプの先に既にフィヒテの如き哲學者がその邊の消息を明らかにし、更に溯ればペス

タロッチーの如き先覺が、具さにこれを人類に教へたのであります。がそれを、吾々が氣づかずにうつかりとして來た爲めに、教育の如き大事もついにその妥當なる役割といふものを認識されないで今日の如き狀態に立至つたのであります。

しからば、教育といふはたらきが如何にして社會改造の原理、もしくはその條件たることが出來るか、それは教育といふ仕事の性質を吟味し、もしくは社會改造と云ふことの性質を少しでも吟味してみれば思ひ半ばに過ぐるものがあると私は思ふのであります。

一体教育といふ仕事は、何を相手にすることであるか。吾々は教育をする。それは直接には太郎とかお花とかいふやうな個々の人間をその對象としてゐる、つまり教育活動は直接には個々の人間を對象とする。決して直接に家庭を對象としたり、社會を對象としたり、民族や國家といふものを對象とするものではない。しかし乍らその個人對個人の交渉の間に、時代世相も經濟難の世相も、道德の頽廢も、すべて明瞭に現はれて來るものであり、また感得されるものである。そこで更に、その現象のその理由は何であるか、その原因は何處から來るかと自然に考へられて、そこに、社會とか、國民とか、超個人的のもの即ち大衆的のものを知るに至る。これを他の方面から考へて見るなれば今日の日本の社會は、如何して斯くも腐敗してゐるか。日本の社會の墮落――それはどういふことであるかと吟味してみる。結果は、それは個々の日本人の腐敗といふ事である。現代の社會

が腐敗してゐるといふことは現代人が腐敗してゐるといふことである。政黨が腐敗してゐるといふことは政黨人即ち政治家といふ者が腐敗してゐるといふことである。教育界が腐敗してゐるといふことは、先生即ち教師が腐敗してゐるといふことである。だから社會の改良といふ風なことを抽象的ではなくて、ごく具体的に考へてみると、實は各個人といふものを改良するといふことであります。頻りに人々は社會改良とか國民大衆の教育とかいふけれども、しかし具体的に考へてみると個人々々を改良することの外に社會改良といふことは、私は決してないと思ふ。然るに個人々々を改良するといふことこそは——やがて一つの國、一つの社會、それを改良するといふことに外ならないのである。そして教育の仕事と社會の改良といふ仕事とは、實は一つの仕事の異つた説明といふか、見る方向が異つてゐると云ふか、たゞそれだけに過ぎない。同じ一つの仕事を一方から云へば教育であり、他面からいへば社會改良である。私はさう思ふ。教育の仕事と、社會改良の仕事は決して二つの仕事ではない。教育活動と社會改良は二つであると思ふのは、認識の錯誤に過ぎないのである。そのことはペスタロッチーの生涯がよく説明してゐる。私はいつもいふ、ペスタロッチーは教育者ではない。人々はペスタロッチーを優れたる學校の先生だと思ふから、それだからペスタロッチーといふものが分らない。ペスタロッチーは尤も優れたるは社會改良家だ。スヰスの社會就中貧民の社會といふものを改良することが、それがペスタロッチーの終生の仕事であつた。しか

もはつきり意識した社會改良家であつて、それがそのまゝ言葉の正しき意味における教育者であつたのである。教育者たることゝ社會改良家たることゝは、意識的にもペスタロッチーにおいては一つに統一されて居つたのであります。教育の性質、社會改良といふことの性質を、具体的に調べてみると、誠にさういふわけのものであらうと私も思ふのであります。

そこで私は社會改良の原理としての教育、社會改良の條件としての人間教育といふものは、ごこに着眼したらいゝだらうか、社會改良としての教育の着眼点といふものを、これからお話を致してみやうと思ふのであります。これからが謂はゞ私の話の本論であります。

三、基礎教育の正しい認識（小學教育に對する理解）

「小學教育とは何か」「社會改良の原理としての教育は、どこに着眼すればいゝか」斯ういふ問ひに對して、私が答へなければならないことは――、先づ「基礎教育の正しい認識」、その正しい認識に基くところの基礎教育の徹底といふことが、小學教育の本質でありそれが社會改造の歩むべき第一歩である。と私は數年來切に考てをるものであります。

こゝに基礎教育と申しますのは、今日お集り皆樣が平素孜々として携つておいでのその教育を意味するのであります。私がこゝに基礎教育と申しますのは、皆樣の仕事、即ちこの小學教育――或は中等教育といふもの、これが私の概念による基礎教育でありますが、うちにも特に小學教育といふものが、私のいふ基礎教育であるのであります。

此基礎教育の正當な認識といふものが、私の社會改造としての教育に非常な深い關係をもつのでありまして、此故に私の本日の講演は「社會改造の原理としての小學基礎教育の本質」と改題してもいゝことになるわけであります。

私の見るところでは、現代のわが小學教育は、いま一種の危機に直面して居ると云つてい、と思

ひます。その重大なる原因は、惟ふに人々が、小學教育といふもの、本質に對する正しい理解を欠いてゐる。その正しき認識を有つて居らない。と言つてい、ところにあると思ふのであります。此の二、三ケ月前に――三、四ケ月前に亡くなつたケルシエン・シュタイナーに、かつて私がミュンヘンで會つたとき、その時彼はこんなことを云ひました。「わがドイツの學校教育といふものは、既に幾世紀もの長い間世界の模範になつてきた。日本の教育、小學校令第一條の如きも、實はドイツの或洲の――（それはサクセンといふ洲――、そこの小學校令のことです。それを私は初めて西洋へ行つた時に、ふと氣がついたのでありますが）翻譯だが、さうしてドイツは世界各國の教育の模範となつて經過してゐる。さういふわがドイツの學校教育も、今や一大反省をしなければならない時機に逢着した。そのわけは、いまだドイツ民族においても、小學教育といふものに對して――（向ふでは國民教育と申すのでありますが）まだ正當な智識を有つてをらぬ。從つて小學教育に對して資本を下すことがいさゝか不足をしてゐる。この聊かの不足といふものは、實に恐るべきものである。基礎工事において――、いはゞ枕木を入れるといふ基礎的の工事だから、僅かばかりそこに手を疎かにするといふことは將來に非常な大きな破綻を生じてくる。小學教育そのもの、破綻は僅か一分か二分であるかも知れぬ。だがそれがだんゞ年と共に社會全体に非常な亀裂を生じてくる。遂ひにはその大きな欠陥の爲め國を擧げて色々な教化運動を起して、何んとかそれを救はうと

する。けれども、それは既に遲いので百年河清を待つが如きものとなる。そこでドイツ國民に對して始終いふ。小學教育といふもの、本質を國民が正しく理解しなければならない。そして小學教育に對して國家は潤澤な資本をおろさなければならない。もしそのことが出來るならば、その他の問題は殆んど解決されざるものはないと言つていゝのである」これはケルシエン・シュタイナーの話の一節でありますが、私にはこの話が實にわが意を得たところのものとして、此の話を聞きながら祖國を顧みて、彼れのこの言葉はこのまゝわが日本にも當嵌りはしないか、人々は小學教育の本質といふものに對して、はたして正しい理解を有つて居るかどうか。——この正しい認識を欠くと云ふそのことが、種々の醜い若しくは暗い問題を國家全体に渉つて惹き起してくる。彼れの言ふ通りだと、私は彼の地でつく〴〵と感じたのであります。

小學教育に對する正しい理解がないために、その結果が誤れる實用主義などといふものをふりかざすことになつたのであります。私はこれを現實主義の禍「實用主義禍」と申すのでありますがこれは過ぎし廿數年來の、わが國の國民教育の歩んで來た歴程に、殘念でも呼びかけねばならないところのものであります。人々が教育の進歩と思つてゐる間に、實は教育そのものが自己の王國から顚落しつゝあつたのであります。そこに吾々はプラグマティズムの實用主義禍といふものを指摘しなければならない。それには色々な理由もありませうが、これはどうしても外國の——殊にアメ

リカの思想といふ風なものがその責を、相當に負はなければならないのであります。

今日の日本は、思想の挾擊にあつて居るのであります。それと同時に教育思想もまた挾擊を受けて居るのであります。一つの思想はロシアの方からシベリアを經由して來るもの、これは共產主義の名において呼ばれるところの思想群である。もう一つの思想群はプラグマティズム、實用主義といふ思想であつて、これはアメリカの方から押しよせてくるところの思想群である。兎に角日本といふ國は思想上、誠に興味ある一つの位置に立つてゐる。西の方から共產主義といふ思想が來る東の方からは實用主義といふ唯物論的の思想群が押しよせてくる。政治も道德も宗教も何んのそのといふやうな勢ひでやつて來る。この二大思想の挾擊、共產主義と實用主義との挾擊、此間に身を處するところの吾々民族はこれをどうして克服して行くか、どんな態度でこれを切拔けて行くか、または如何消化してゆくか、これは教育學者ならざるものと雖も、誠に興味ある一つの展望といはなければならない。そして實用主義といふものは三十年來わが國の教育の實体の中に割込まれて、最近はそれが役に立つ教育の名において、教育の制度といふものにまで深く浸潤して居ることは人のよく知るところであります。

さて、役に立つ教育、もしくは實用主義の教育といふものを唱へる人々は、斯ういふことを言ひます。「教育と云ふものは役に立たなければならない」と。勿論、これは實に動かすことのできな

い一つの主張であつて、私が教育の歴史を十三、四年調べて見たところに依つても、五千年の教育思想上たつた一人と雖も、「吾々は役に立たない教育を目的とする」と云つた風な立場で教育の說を唱へて居る人を一人も私は知らないのであります。古代ギリシャにおいても異口同音に役に立つ教育といふものを、云ふを要せぬほど左樣な自明の理として考へて居つたのであります。さう考へてくると吾々は役に立つ教育等と稱へるのは寧ろ不可思議と言ふべきであります。しかしこゝに問題になるのはその謂ふところの「役に立つ教育」は如何にして可能であるか、といふことであります。私もまた、「凡そ國民の教育といふものは役に立つべきものでなくてはならぬ」と、この点において前の文部大臣田中氏と全くその見解を一にするものでありますが、しかしその役に立つ教育の概念如何、役に立つ教育とは何か、また役に立つ教育の基礎根據は何か、といふやうな問題になるならば、私は現代の大方の人達と袂を別たなければならないのであります。蓋し多くの人々が「今日の教育を受けたものが役に立たないのは、教育が實用主義によつて目論まれてをらないからである」といふもの、如くでありますが、言葉を換えていふならば、——一層露骨な言葉でいふならば、「職業的の教材といふものが、教科課程の中に入つてをらないから、それで學校教育を受けたものが社會へ出ても役に立たない」、斯ういふもの、如くであります。しかしそこが非常な問題であります。役に立つ人間を作るためには職業的の材料といふものを果して必要とするだらうか、

「手から口へと役に立つところの職業的の材料によらずんば、役に立つ人間といふものは、はたして出來ないものか」といふことがまづ一つの問題として考へられねばならぬのであります。今日の學校を卒業したものが役に立たないのは、若し私をして云はしむるならば、この見解こそ、不幸にして全く誤つて居るもの。もし材料が實用的であり職業的であれば、役に立つ人間が出來るといふならば、各種各樣の實業的の學校といふものは、定めし役に立つ人間を作つて居るであらうとも云はれるわけであります。ところが吾々の理解する限りにおいては、各種各樣の所謂實業學校なるものは必ずしも、眞に役に立つところの人材といふものを作つて居らない。その点においては普通の學校と全く同じことである。農學校、工業學校、商業學校等の先生は口をそろへて云ふ「どうも卒業生といふものは、本當に鋤鍬を取つて自ら耕やし、額に汗することをせぬ。さういふ役に立つ人間が多數に出ない」と。これを以つて見ても、もしも材料が實用的であるならば、或は職業的であるならばその教育が役に立つ筈であると云ふ如き考へ方は、全然誤まれるものであると言はなければならないのであります。私はその論といふものを全く取るに足らないものと言はなければなりません。「教育の仕事は材料によつて既定されるものではない」これが私の持論であります。もし與へられたる客觀的の材料によつて教育の勝敗が決まるものであるならば、それは教育上の唯物論といふものである。若し現代の教育が役に立たない人間を作り出して居るとするならば、その原因は職

業教育を小學校や中學校で授けないがためではなくて、それよりも大切なる人間教育の大本を誤つてゐるからではあるまいか。言葉を換へれば小學教育といふものに基礎教育であることの認識不足があり、惹いてそこに何ものかの欠陷を殘してゐるためではあるまいか。今一歩小學教育即ち人間をつくる基礎教育に徹する道を工夫することが、即ち役に立つ教育に對する眞の忠なるものではあるまいか。私はこゝ數年の研究の一つの結論としてこれを申上げるのであります。

そこで、その謂ふところの基礎教育とは何ぞ。如何なる教育を呼んで基礎教育といふか、基礎教育の根本概念とは如何なるものであるか。こゝまで私はこの論を進めなければならないのであります。それが私の今日のお話の本論の中での謂はゞ本論であります。そして、こゝに申上げる基礎教育といふものが、果して現代の大問題を解決する資格があるかないか、といふ中心問題がそれによつて起つてまゐりますが、私は進んで此基礎教育の概念、基礎教育の立脚点といふものをこれから探究して見たいと思ふのであります。

四、人間教育の根本義

一体、小學教育といふものは「基礎の教育」である。基礎とは何だらう。基礎とはそも〳〵何を意味するのであるか。私の考へるところでは、物の基礎といふものは、そこから生命が發展して行くところの謂はゞ母胎の如きものである。そこから生命が生れ出て發展をして行くところの地盤である。若しくは母体である。たゞ生命の源と云つてもいゝ。小學教育といふものは、教育上から考へて、生命の本源をなさねばならない。それが即ち基礎教育といふものである。然らば如何にして小學教育がさういふ意味の基礎教育たることが出來るだらうか。私はそれに對して四つばかりの—項目を上げてそれに答へなければなりません。

1　人生を形づくる印象

私の考へるところでは、第一印象といふものは、つねに人の心の奥深く喰ひ入つて殆んどその生涯に渉つて永久の刻印を貽すものであります。斯ういふことを私は色々な觀察から一つの結論として有つてをるのでありますが、同じ經驗の中でも最初の經驗、出發点における經驗程深刻性をもつ

ものはないと云つてい、と思ふのであります。一体、人間の教育、或は人格の教育、人となりの教育といふ風なものが、言葉ばのま、の嚴密さにおいて若しも可能であるとならば、さういふ種類の教育は、幼き魂を對照としてのみ、恐らく可能であるだらうと私は考へるのであります。プラトーンの「理想國」を讀んでみると、プラトーンはその中にこんなことを書いて居ります。「總て物事は出發点、或は始まりといふものが、わけても必要なものであるが、その中でも人格を鍛へ、若しくはキャラクター、即ち性格を涵養して行くといふ、さうした場合にはこの出發点即ちもの、始まりといふものが就中最も意義深きものである」そのま、の言葉ではないが、かういふ意味のことを彼れは言つて居ります。

また近世教育の開祖コメニュウスも、其の著の中で「産みたての卵においてこそ、これを雌鷄が抱いて暖めれば誠に生々としたところの雛が出るが、最早長いこと捨て、おいたやうな卵は幾ら暖めても健全な雛にはなつて來ない」といふやうなことから筆を起して、出發点の教育が、魂の教育に對して如何に大切な役割を演ずるかといふことを論じて居ります。

私は今までに、色々な種類の教育といふものをやつてみました。小學校の教育もさう長くはないが、兎も角やつてゐました。それから師範學校でも二、三年專攻科を教へてゐました。それから中學校でも暫らくの間、これは多少實驗的に研究する事柄があつてやりました。それから女子師範

でも少しばかり教へた經驗をもつてをります。其後廣島へ行つては、高等師範學校で專門學校の教育に從事して今日にいたりました。そこで、私は長短樣々でありますが、兎も角小學校からずつと大學の教育までをやつてみたわけでありますが、そのわづか乍らの体驗からの一つの結論とでもいふべきものでありませうか、「凡そ人間の教育といふものは上へ行く程樂であつて、またそんなに大したものではない」と思ふに至つたのであります。最早や私は木曜日に講義がすんで休みになつてしまふ。そこらでも一人の學生に會ひましたが、大學生はもう休みに來てゐる。一年のあらかた休みといふのではないけれども、今時分からもう休みを始めてそして七月、八月——九月の眞ん中でもまだ始まつたり始まらなかつたり……。冬は冬で一ヶ月休む、春は春で休む、何んだか休みが非常に多い。一体教育といふことは、私自身の体驗から、平凡かも知れをいけれども、どうも上の方へ行けば行くほど樂であつて、またあまり必要でもないらしく見える。だから私は高等教育の擴張といふことに對しては昔から非常に反對であります。そして下の方へ行くほど六ケしくそして大事なのであります。さういふ謂はゞ歸納的研究の結果から見ても、人間教育の仕事は、上へ行けば行くほど樂で、うつちやらかしたおいてもい、位ひである。ところが下へ行けば行く程、困難でもあり、また重要性の度が高くなります。そして若し嚴密なる意味における教育、即ち人格の教育、人間の教育、魂の教育といふやうなことが若し出來るならば、これは誠に幼き魂を對象とすることに

よつてのみ可能なことであると言はるべきであります。最早や脇の下へ毛が生えるやうになると、教育の對象として資本をおろしても、おろし甲斐のない浪費である。教育の浪費である。それで私は、若し人間の魂の教育が可能ならば、これは幼き魂といふものを對象とすることによつてのみ、其成果を擧げることが出來る、とかう深く信ずるものであります。

こゝに小學校の卒業生と、中等學校の卒業生と、專門學校の卒業生と、大學の卒業生と四人居ると假定する。この四人を比較してみると、智識といふ方面からは非常な急なカーブとでも申しませうか、小學校を出たものと、中等以上の學校を出た三人のものとは、非常な急な智力の差が表現される。即ち智識の教育といふものは上へ行けば行くほど顯著であるのであります。これでは高等學校がまことに大切だなど、素人や表面よりわからない人達は申しませう。

しかし人間性として——人となりといふ言葉はあんまりいゝ言葉ではないが、その人間性人格性人間味、かういふ純粹の內面狀態からこの四人を比較してみたならばどうか、ことによれば教育を受けないもの、方が、却つて優しい掬すべき純情をまだ多分に有つてをるかも——と思はれる。なまじ色々な教育を受けて、そして收賄事件に連座してみたりろくなことはしない——といつては云ひ過ぎ、失言は取消さなければならないが——兎も角いわゆる教育ある人々の人格性、純粹な內面性といふものに對しては、私は非常な懷疑を、明らさまに有つてをるものであります。教育を受け

れば受けるほど非人格的なものになる。と云つては少し云ひ過ぎかも知れないが、さうさへもいひたいほど、どうも高等の教育を受けるといふことは純粹な內面性には、なか〳〵に響きにくひものである。私の意味はさういふところにある。同じ汽車に乘つても二等とか、一等といふものになると何んだか冷淡といふか、薄情といふか、人らしさ人間らしさといふものが却つて少い。反つて三等車なんかに乘つた方が——西洋でも、ドイツには四等の汽車があつて、私はその四等の汽車に乘つたが、此世界には餘程人間味掬すべきものがある。この事實といふものは——えらい亂暴な話になりかけてきたが、何を吾々に物語るか、どうしても本當の魂の教育とか、人間の教育などと云ふものは上の方へ行つては、なか〳〵出來るものではない。智識なら幾らでもあるけれども、人間そのもの、教育は上へ行つては出來るものではない。下の方で既う勝負がついてしふまゝことは決定する。だから魂の教育にして若し可能であるならば、私は幼きものを對象として行つてのみそのことがはじめて目論まれる。そのことが取行はれなければならぬといふのであります。幼少の頃の意識の構造といふものは、一種獨特のものと見えて、本當の教育が浸潤して行く。だから小さいときの記憶は最後まで殘る。——幼い時に見た山河風光は死の間際までつゞく。「秋風骨を埋むる故鄕の山」といふ風な英雄のうたつた歌もある。兎に角おさない時の印象、即ち第一印象といふものは、一番人格の內面性といふものに極印をうつ、——皆樣にも一度よく、考へて見て頂きたいと思ひま

す。

そんなことを考へると、ペスタロッチーやフレーベルなどは、教育の着眼点を決して誤まらなかつた。流石に誤らなかつた。ペスタロッチーのやうにどんな教育でも考へられるものが、強いて子供の教育を八十一年もこれをこそと選んでやつた。フレーベルは更に掘り下げて行つて、幼兒の魂の教育をやつた。どうもペスタロッチーやフレーベルの着眼の正しさに驚かねばならない。私は今にしてつくづく感じられるのであります。

要するにこの小學教育といふものが、眞の基礎教育たり得ることの理由、その一つとして私はその幼き時期における一つの經驗、或は初歩の認識といふものが、一種獨特の教育性を有つてをる、とどうしても考へられてならないのであります。

ペスタロッチーは、社會改良といふことを目的にして居つて、先にも申した如く、どうかしてスキスの社會を改良したい。とさう熱切に考へ乍ら、所謂社會教育といふことには一指をも染めずして、幼少年の教育に八十年の生涯を費やしたのであります。しかし社會教育といふものには最大の眼目をおき、そして偏に幼きもの、魂の教育に一貫したといふこの事は、蓋し偶然ではない。私はさう考へるのであります。

2、生活開展を支配する意識

小學教育が、基礎の教育たることの出來る第二の根據として、私は吾々の意識そのもの、構造といふべきか、その發展の法則といふべきかこゝに「意識の連續發展性」といふものを擧げなければなりません。元來、教育の仕事といふものは、人間の心的生活を目指すところのものであるとするなればこの仕事は意識の有つ性質といふものに、絶對基づかなければならないのであります。而して意識の性質が何よりも先づ、内面から發展してくるところの連續性をもつと云ふ一つの特色がある限り、この特色からして初歩の教育、即ち小學教育といふものが、出發しまた基礎づけられなければならないのであります。

フレーベルは「人間教育」といふ書物の中でこんな事を書いて居る。子供が生れて暫らく經つと母に對して微笑する。二ケ月か三ケ月經つて、自分を產んでくれた母に對して微笑する。この微笑の有つ意味といふものをフレーベルはつくづくと考へた。普通の心理學者に云はせると、一種の反射運動であるといふけれども、フレーベルはそこを考へた。「これを何かの生理的反射運動であると云つて片付けてしまふことは出來ない」生れた子供が二ケ月か三ケ月經つて、わが產みの母に對して微笑するこの微笑は、次の瞬間には父親に對して現はれる。それが暫らくすると兄姉に對して

同じ微笑が現はれてくる。つゞいて自分の仲間といふか――隣人に對して現はれる。それきりかといふとなか〳〵、非常な勢ひを以て今度は隣人をこえて彼は人類に對して微笑むやうになる。

人類に對して微笑んだらそれでもう最後かと、フレーベルにきいてみるとまだ〳〵、もう一つある。即ち絶對實在としての神に對して彼は微笑まなければやまないと云ふ。吾々人類がもし神に對して微笑みする。こゝまで行けば、最早神人和合の境地に及んで、人間の微笑も至つたと云つていゝかも知れない。しかしそこまでに至る道行き、その據つて來るところを具さに点檢して見ると、豈圖らんや生後僅かに二ヶ月、三ヶ月にして先づわが母に對して微笑した――實にその微笑が、據つて來るところとなつて、遂ひに人類、及び神といふものに對してまでも彼はほゝゑまざるを得ないのである。とフレーベルは言つて居るのであります。このやうに吾々の意識といふものは出發点から一つの連續的に發展してくるものであつて、こゝに微笑について言つたのは、たゞ解り易い例を取つたのでありますが、總て人間の精神、總て人間の意識といふものは、斯ういふやうな約束の上に立つて發展してくるものである。だから初歩の認識といふものを、即ち出發点の認識といふものを醇化する。もしくはこれを確立するといふことが、實に人間教育の全体から考へて、最も尊い重大なるものであることを知らねばならないのであります。

微笑とはどういふことであるか。フレーベルにいはせると、これは魂と魂との融合合体といふこ

とである。吾々が互に微笑み合ふといふことは、我と彼と、――彼女とでもいゝけれども、二つの魂といふものが融合する。二つの人格といふものが融合するといふさういふことである。これは、魂の合流作用といふものでなければならない。これは決して反射運動ではない。二人が互に微笑み合ふ、これは確かに人格の交流作用である。人格と人格との融合作用である。だから神に對して微笑むことは神人和合といふことである。かうフレーベルが申して、自分の幼兒教育の基礎を明らかにしてをるのでありますが、私はさういふところに基礎教育といふものゝもつ根本の意味が、確かに暗示されてをると信ずるものであります。

若しも、吾々の意識といふものが内面的に、最初の一点から連續發展するものであるとするなれば、その最初の一点といふものを醇化する――若しくはそれを確立するといふことは、凡そ人間教育の仕事のうちで、一番大事な基礎的の、本質的の、中心問題でなければならないのであります。

またペスタロッチーの如きも、この邊の事情にはよく通じてをつたので、その一生の仕事といふものは、要するに人生初歩の認識を醇化しやう、これを確立しやうといふ此一事であつたのであります。彼はそのことばかりを云つて居ました。そのことの結論として、彼れは人間を教育する秘訣として三つの原理を見つけました。

一、單純性の原理

二、完結性の原理
三、連續性の原理

此三大原理といふものを本當に理解して、そして仕事にかゝるのが、これが教育の秘訣であるとペスタロッチーは云つたのであります。

ペスタロッチーは、先づ人類の教育といふものが、あまりに複雜になつてをるといふことを見て恐れ戰ひいたのであります。十八世紀の啓蒙教育にはその意義と重要性とを人一倍感じた彼れも、この復雜さには之れは困つたと考へた。人間が人間になる爲めにはこんな復雜な繰り事は必要がない。神は總のて人間を一人の例外なく人間にし樣といふ思召に相違ない。一人の例外なく總ての者が人間になる道としての教育は、之は總てのものに手の届く樣な極く單純なものでなければならない斯ういふ考へ方であつたのです。だからペスタロッチーは學校を參觀して、い、學校か悪い學校かを決めるのに、學校の教育が複雜か單純かで決めたらしい。ペスタロッチーが視學にでもなつて學校を觀に行けば、複雜してゐると之ではいかぬ、極く單純であると、之ならい、と言つたでせうそこでペスタロッチーは認識のＡＢＣ、直觀のＡＢＣ、數と形のＡＢＣ、藝術のＡＢＣ。ＡＢＣ即ちイロハといふもの、研究に幾十年を費やしたのであります。ごうかして人類の教育をもう少し單純にしなければならぬ、單純にするためにはイロハを見付けることが必要である。教育の仕事は

認識の發展性を重んずる、然らばその認識のイロハとは何だ。子供に數學を教へる。數と形、そのイロハは何だらうか。子供に道德、宗教の教育をしなければならない。そのイロハは何だらう。子供に技能の教育をしなければならない。しかし技能のイロハは何だらう。彼はそのイロハ、その原理とはどんなものか。それを七つばかり擧げました。即ち「引く」といふ働き、「押す」、「廻はす」「投げる」といふ働きなど、かういふやうな技能のイロハ七つを教へて居る。この七つは果してイロハかごうか私は知りませんが、兎も角人類の教育が斯くまで複雜になつてゐることは神の御心でない。ごうかして人類の教育を單純化してみたいものであると、さういふことが彼れの大きい念願であつたのであります。

そこで、彼れは吾々の智情意すべての方面に亘つて、ＡＢＣ（イロハ）といふものを詮索することに殆んど没頭しました。さて、そのイロハと共に單純性といふものが必要である。更につゞいてはそのイロハを完結しなければならない。もし認識のイロハといふ風なものを本當に完結させればそこに力の意識といふものが起つてくる。ペスタロッチーは「力の意識」といふ言葉を使つた。小西先生にでも云はせたら「意識の眞實性」とでも云ひたいところでせうが、ペスタロッチーは、力の意識といふものが湧いてくるといつた。つまり認識のＡＢＣといふものを本當に内面化し人格化するところ、そこに意識の眞實性が湧き起る、意識の眞實性がそこに湧き起れば、それから後は、

ペスタロッチー自身の言葉でいへば、彈む車の如くに內から連續發展して、最後の到着點まで進んで行くものであります。そしてこれがペスタロッチーの連續性の原理といふことになつて來るのでありまして、單純性、完結性、連續性を以て人間教育の三大秘訣であるとペスタロッチーは申したのであります。誠に大切なものでありますが、我國の教育は、はたして之を考へて來たか如何か。吾々は今、國家の教育、人類の教育、殊にわが國の教育といふ重大事に直面して、あまりにも研究未熟、その用意の怠慢であつたことに氣づくものであります。

何故に、わが國の教育はこれと反對の方向をとつてゐるのでありませうか。六ケしいことを澤山にやれば——先の言葉でいへば役に立つ或は本當の力がつくと云ふ、斯ういふ行き方であるから、丁度ペスタロッチーの教育の逆を行くやうなものであります。それが今日の我教育であるといふことが出來ます。吾々——いづれの國でも實力を養成するには、難解な材料を豐富に多量にたゝき込む、こゝに實力涵養の秘訣がある。といふふうに考へてゐる。此考へ方と、ペスタロッチーの考へ方とは、どうしても逆になつてをるのであります。ところが最近のドイツの教育を見まするとと、丁度それがペスタロッチーの三つの原則といふものにピッタリあてはまつてをります。私は二度目に西洋へ行つて、はじめてそれを知つたやうなわけでありますが——わたくしには一つの癖があつてどこの國へ行つても其國の教科書を全部集めるといふ一つの習慣をもつて居ります。ドイツへ行け

ばドイツの小學校の教科書を全部集める。二度目に行つた時にも——一年以上も居りましたから、ドイツの小學校の教科書を全部集めた。それに依て私の氣づいたことは、ドイツの小學校の——小學校ばかりではないが、教材といふものが極めて平易であつて分量が甚だ少い、さういふ事實に氣づいたのであります。教科の種類によつて、一概には論じられませぬが、大体において教材といふものが平易であつて而して少い。ですから本當にそれを完結することが出來る。單純で完結して、そして連續發展して來る。こころがどうして日本の教育といふものは、非常な傳統の力に押流されてペスタロッチーのいふが如き單純性、完結性、連續性と云ふものには非常に遠いのであります。

ペスタロッチーは一生涯を捧げて、教育の單純化といふことに精進したといふのでありますから容易な事ではない。兎も角我國の教育といふものも一層これを單純化する、而してこれを完結する本當に完結して所謂意識の眞實性といふものが、中から湧き出るといふやうにすることが、それが取りも直さず實力涵養といふか、役に立つ人間を作るといふか、さういふ目的に合致するものではないかと私は思ふのであります。

兎も角、初歩の認識といふものを醇化する。これを規範づけるといふその爲には、直觀教授が必要であるかまたは勞作教育が必要であるか、必要なものはなんでも實行する。或は直觀教授、或は勞作教育、或は概念教授、生活教授、生產教授、或は綜合教育、何んでもいゝ。如何なる原理でも

總て取入れて、認識のＡＢＣといふものを本當に人格化し、意識の眞實性が内から起つてくる樣にする。斯ういふ樣な工夫をしなければ、教育亡國とでも云ひませうか、いかに教育を盛んにやつても、なか〳〵社會といふものが本當の力を持つて來ない。日本の社會を若返へらす秘訣は、日本の教育をもう少し認識のＡＢＣに立返へらせるといふこと、さういふ工夫が緊要ではなからうか。そしてこゝにこそ社會の改良も國運の發展も、はじめて力强い歩みを出發するのだと云つていゝと、私は思ふのであります。

3、本質教育

「小學教育が基礎教育」であるといふ事の第三の根據として、私は「本質教育」即ち、人間生活及び人格内容の教育を申上げたいと思ひます。先程私はペスタロッチーの說を引いて認識のイロハといふ云ひましたが、此の單純なイロハといふものは、實は物の本質を意味するのであります。

自然界にせよ、人間界にせよ、現實の世界といふものは、誠に混沌たるものでありますが、この混沌たる現實界から總て本質的でないところを排除して、ひとへに本質的なものを把握してみるとそれは誠に單純な要素的な原則的なものであります。即ちペスタロッチーがイロハといつたのは此現實界における非本質的なものを選別排除して、そして殘るところの本質的なものをつかまへる、

これが認識のＡＢＣである。斯ういつたのであります。この本質の教育といふものを正しく理解しそれに徹することが、これが本當の意味で力のあるところの、若しくは役に立つところの人間を作る秘訣であり秘傳である。と私はさう考へるのであります。

何故、本質教育が基礎の教育か、本質の教育は如何にして基礎教育たることが出來るか、若し斯ういふ問ひを出されるならば、私は答へる。物の本質といふものは誠にそのもの、一般性である。若し本質が一般性であるならば、その一般性といふものを本當に人格化して行くところ、行くところとして可ならざるはなしといふべきか、何處へ行つても作用する——通用するところ、働くところの能力と、それがなつて來る。しかしこゝに言ふところの一般性とは少しく註釋を要するところの一般性であります。

およそ一般的のものには、三種類あると思ふのであります。第一の一般性は、哲學的の一般性として、哲學的な、論理的な演繹によつて把握するところのもの、極めて概念的な、抽象的な一般性である。かういふものには生命が宿つてゐない。生命のない抽象的一般といふものは、物の基礎となることが出來ない。私は最初物の基礎といふものは生命の本源である。それから生命が開展して行く母体であるといふ意味だと申しましたが、哲學から割出されたところの抽象的一般といふ風なものは、遂ひに吾々の生命の母体、或ひは生命の展開して行く地盤たることは出來ないのである

故に小學教育が基礎の教育であるところのその基礎教育、即ち本質教育の謂ひであるといふ場合には、これを當篏めるわけにはゆかない。また此外に、此現實界から多くの事實を集めて、この事實に極めて共通してゐる共通点だけを抽象し、そして捉えたところの歸納的な――、哲學的な一般性に對して自然科學的な一般性として考へられたものがあるが、これもまたわれ等の生活の血となり肉となり得るものではないのであります。

惟ふに、哲學的であらうが、自然科學的であらうが、抽象的なる一般者といふものは、本當の生命といふものを内に含むものではない。つまり上から來やうが下から行かうが、即ち演繹的に行かうが歸納的に行かうが、抽象的一般といふものは、決してもの、本質ではない。それには生命がない。そこで吾々は、上からでもなく下からでもなく、内から把握するところの、即ち人格的に於て直觀するところの具体的一般性といふものを、もう一つ考へなければならぬと思ふ。一体もの、考へ方には三通りある。まづ、プラトン的なもの、これは一般的なものから個々のものへ及ぼす天ま下り的、即ち演繹的のもの、次ぎは、その個々特殊のものから考へて行くところの、即ち下から行くところのアリストートル流の歸納的のもの。今までの多くの學問の方法、物の考へ方は、このプラトーン的か、アリストートル的か、即ち上から行くか下から行くか、哲學的か自然科學的か、演繹的か歸納的かの二つであつた。が最近ではこれに對して第三の新らしい考へ方、學問的方法といふも

のが提案された。それは私の言葉で申せば内からの方法である。上からでもなく下からでもなく、寧しろ内からの力即ち人格の直觀に依るものと云つてよからうと思ふ。この内からの方法といふものは謂ゞは、現象學的な本質直觀ともいはるべきものであります。

私が、こゝに本質教育といふとき、その本質は一般性である、といふのでありますが、この一般性は哲學的の一般性、自然科學的の一般性ではなく、現象科學的の一般性とも云ふべき具体的一般性であります。抽象的の一般性といふものは生命の母体になることの出來ないものであるが、此具体的一般性――一般者と云ふものは其中に生命を含蓄して居る、生の根源たることの出來るものである。斯ういふ意味の一般性、之のみが私が云ふところの本質となり得るところのものである。即ち小學教育が基礎の教育たることが出來ると云ふ場合のものは即ちこの一般性であり、この本質であるからであります。即ち行くところとして可ならざるはなしと云ふのも此故であります。

要するに私が、「小學教育が基礎教育」であるといふことの一つの意味は、それが本質教育であるといふことであるからであります。この本質教育に徹底する。かういふ工夫をするのが本當の意味で役に立つ教育と役に立つ人間を作る、さういふことになると思ふのであります。小學教育の中に、徒弟學校の出店を開いてみる、さういふ風な淺薄な行き方でなくて、本當の基礎教育を、本質教育を使命とするところの小學教育の中に、この本質教育を徹底して、人間としての人物を養成し

て、こゝにはじめて眞の役に立つ教育が行はれるものであると私は考へるのであります。

元來、役に立つ教育への準備といつたやうなものには、二通りあるだらうと思ふのであります。本質的な立場に立つて內面的な生活準備において役に立つ教育をして行くもの、本質的でなくして謂はゞ非本質的な立場に立つところの役に立つ教育——或は云ひ方を少し變へるならば、抽象的な立場、末梢的な立場に立つところの生活準備をしてゆくものと、本質的な眞の永遠的な立場から生活準備をしてゆくものと、この二つがあると思ひますが、小學教育といふものは、末梢的なものや抽象的な立場ではなくして、內面的な立場、本質的な立場に立つて、こゝにはじめて嚴正なる意味の、また最高なる意味の生活への準備、役に立つ教育といふものはなされ得べきもの、茲に於いてのみ小學教育は自己の本領といふものを、初めて忠實に果す事が出來ると私は思ふのであります。

4、統一ある生成發展の人格（社會改造の原理としての教育）

小學教育が基礎教育であるといふことの第四の根據は「全体的教養」といふ言葉で現はすことができます。

ペスタロッチーは教育の仕事といふものは、結局調和的な、人間をつくること即ち子供を調和的に發達させることであると說いて「調和」といふ言葉を持出してゐるのであります。ヘルバルトは

御承知の通り「多方趣味」といふ說を立て、——これは余程心理學的でありますが、そんな說き方は問ふ必要はない——。兎も角ペスタロッチーは調和的發達、ヘルバルトは多方興味の涵養、結局結合意識といふことであらうと思ひますが、つまりそれは全体的教養といふことであります。小學教育が基礎教育であるといふことの意味は、小學教育が全体的教養といふ点に立脚せねばならぬといふことであります。

この問題を最もよく考へたのは、矢張りペスタロッチーであつたのであります。彼は斯ういふことを考へました。ごうせ自分の教へる子供は貧民の子供である。貧乏人の子供である。これはごうしても社會に出て役に立つ人間にしなければならぬ。即ち手や、腕の充分に働く教育をしなければいかぬ。そこで彼れは今日の言葉でいへば「人間工學」といふものを考へた。これは面白いものであつて、手の人間を作るといふことは、働きのある人間を作るといふことである。すべての人間が働かねばならないのは勿論だが、無產者は一層働く手を持たねばならない。しかしその手は一体何によつて動かされるのだらうか、手が手を動かすのであらうか、いや手を動かすものは頭である。だから頭が強く正しく働いて來なければ手も足も強く正しく働くものではない。然らばその頭は何が働かせるのだらう。頭が頭を働かせるのだらうか、いや頭はもうひとつの奧の方——奧だかしたの方だか知らないが心臟といふものが頭を動かすのである。即ち內面的な感激、深い信仰、さうい

ふものが、奥の方で働いて、こゝに始めて頭といふものがしつかりと確實に働く。頭がしつかりと働くことによつて、手足がしつかりと確實に働いて役に立つ、こゝにはじめて有能な人間になるのである。彼れはかう云ひました。

斯くの如く、彼の人間工學は、手より頭へ頭より心臓へ、と進んだのでありますが、逆に頭や心臓は如何なるダイナミックスによつて動いてくるかといふに、それはひとへに手を働かすことによるの外はないのであります。このペスタロッチーの、手と頭と心臓とは、始と終が一致するところの圓周上に分布されたる三つの点であるのであります。これは私の言葉でいへば、ペスタロッチーの人間工學はアメリカ的な、自然科學的實證科學的なものではなくて、内面的な、全人的人間工學であると考へます。即ち彼は手と頭と心臓といふ相關々係といふものを深く考へて居つたのでありまして、この意味においてペスタロッチーは、手の人間、役に立つ人間といふものをかつて忘れたことがなく、それだからこそ、手と頭と心臓との調和、若しくは均衡といふことを教育の理想にしたのであります。決して偶然ではない彼の偉大さをこゝに見ます。斯うして吾々はこの小學教育の根本義といふものを、かういふところに再吟味して行くことが、非常に大切であると思ふのであります。

また、ペスタロッチーは、斯ういふ問題を研究しました。丁度彼れがチューリッヒのまだ學生時

代、或日新聞を見たところが、二人の娘が父無し子を產んで絞め殺した、そこで青年ペスタロッチーは驚いた。肌の血を見ても戰慄くやうなスヰスの田舍の乙女が、どうして自分の產んだ子供を、絞殺すやうな悲慘なことをするのだらう。これが文明の王國、キリスト教の本土においておこるとは誠に不思議だ、これは恐らく新聞の誤傳に相違ない、と初めは信じなかつたがだん〴〵新聞記事を讀んでみると決して誤傳ではない。二人の田舍娘が父無し子を產んで殺した。而してこんな實例はわがスヰスに幾らでもある、といふことをペスタロッチーが知つて愕然とした。そこで彼れは、何んとかして文明の屈辱として斯くの如き社會的犯罪といふものを防ぎ止めたいものである、といふ考へから研究すること十四年、實に十四年間彼は嬰兒殺しといふものを研究致したのであります。そしてその研究の結論はどうであつたかといふに、曰く「嬰兒殺しといふものを防ぎとめる方法なし」といふの外はなかつたのであります。十四ケ年も研究して定めし名案があつたらうと思つたのが、曰く「なし」となつた、そのないといふ結論がいかにも面白い。これは「立法と嬰兒殺し」といふ書物の中にありますが、吾々教育家には非常にいゝもので、私共のペスタロッチー百年祭の時にペスタロッチー全集を出してその第二卷に立法と嬰兒殺しの飜譯を入れてあります。その時「どうも表題の感じが悪い、何んとか一つ長田君表題を變へて貰ひたい」と友人が云つた。そこで私も考へた結果「立法と教化」といふ風に變へたのであります。私は自分のことを告白するのでありま

すが、私の訓育論の根本はペスタロッチーの「立法と嬰兒殺し」を研究し敷衍したものであつてそれ以上を一歩も出るものではないのであります。

ペスタロッチーが嬰兒殺しといふものに就いて、長年研究して得たところの結論、此「なし」といふ結論は非常に教育史上重大な發見であります。何故「ない」かといへば、ペスタロッチーは「すべての惡德は美德と共に一般的（社會的）關連をなしてをるが故に、嬰兒殺しといふ特殊な犯罪を防ぎ止める方法といふものはない」と云ふのであります。即ち、その防止の方法はたゞ彼女達の人間性といふものを全体として、社會的一般的に高める、もしくは深める、これより外にない。彼女達の人間性を一般的全体として高める、即ち社會全体の教育といふことの外に、嬰兒殺しといふものだけを、何んとかするといふ外科手術といふものは絶對にない、と斯う云ふのであります。これがつまり彼れの長年研究して得たところの結論であります。そして人間性を全体として高めるには即ち幼兒の基礎教育より外に方法はない。基礎教育といふものは人間性を全体として高め、全体を純化して行く、斯ういふことであるからそれは小學教育の外何物もあることなし、社會改良の問題を考へてみる時に、總ては小學教育基礎教育といふものにかえつてくるのであります。

そこで思ひ起すのは、今日デモクラシーの世の中になつて選擧權も一般化されてきた。そこで政治家は頻りに、どうも政治教育が不徹底で困る。どうか選擧する時に清き一票を投ずるやうな公民

教育をしなければならない等武藤山治氏が、政治教育のために十萬圓出すと云つたが、私はその時手紙でもやりたいと思つた。清き一票への教育、さういふ教育は私はないと思ふ。國民として清き一票を常に投ぜられるやうなさういふ教育といふものが若し可能であるとすれば、それは國民の人間性といふものを全体として一般的に高めるより外にない。どんな誘惑にあつても必ず清き一票を選良に投ずるといふ公民的品性が教養されなければ駄目だと私は思ふのであります。恰もペスタロッチーが嬰兒殺しに對する特殊な防止方法なしといつたやうに、吾々は政治教育による清き一票への教育といふ、さういふ特殊な外科的な對策療法といふものは、人間の意識といふものを對照とする限り、人間の精神といふものを對照とする限り、さういふ特殊の教育といふものはないのである凡そ存在する教育といふものは、嚴密なる意味においては人間そのものゝ本質に立脚した全体的教育といふものでなくてはならないのである。この全体的教育といふものが、若し出來なければ一切は闇である、斯ういつてもよいのである。かくしてこの基礎教育の本領——、全体的の教育は、此の立場に立つてのみ——種々な社會問題、種々な國民生活の問題、そのすべては本當の解決の方法その方途を發見し得たものである。この人間性の陶冶、その向上、これを全体として高めること、こゝに人類ははじめて永遠の光明に接したのであります。

ペスタロッチーで思ひ出すものに、もう一つ「除貧論」といふものがあります。彼れはごうかしてすべての人の貧乏を退治したいものであると考へて、これを書いたやうですが――。これを讀んでみると、やはり先程申したと同樣に、「貧民を救こといふことは、貧民から貧しさを取り去つてその代りに富といふものを入替へする、交代作用、チエンジといふことではない」と言つて居ります。普通の社會政策なんかは大抵この間違ひをして居る。彼れは言つて居る。さう云ふことは人間性を知らず、人生も社會も充分認識せざるところより來る一つの迷ひである。貧民を救濟するといふことは、その貧民の内に今なほ失はずにもつて居るところの人間性といふものを、それを全体として高めて行くことでなくてはならない。すべての人々が、そのたましいの奥深くに、たとひ小さくとも持つて居るところの、人間性道德性を、社會全体として高めてやること、それより外に貧民を救ふといふ道は、斷じてない。――貧民だけが人間性や道德性が、必ず低いとは云はれない。それは前にもふれたやうに、上流社會よりも下層の社會の方に反つて、人間味や友情の溫さを見る場合は隨分多いのである――。從つてかうした運動は、必然的にこれが國家の事業といふものにならなければならない。そして人々の知識的道德的、宗教的の人間性を社會全体として高めるより外に救ふよしもない。かう彼れは考へたのであります。だから社會改良家としてのペスタロッチーは教育者といふものにならなければならない。斯ういふことに勢ひなつてくるのであります。わが東洋

の老子の如きも、人々が直接に役立つもの、みをこれ追及してゐるその淺薄な姿を見て「無用の用」と云ふものを說きました。すでに、千年の昔に之を教えて說いた老子がある、驚くではありませんか。思へば吾々は、刻下の危機に面してペスタロッチー、フレーベル、この老子までをこゝに持出して唯物主義、實用主義の禍ひによつて、毒し害はれてをるところのわが人類の教育、國民の教育小學教育といふものを完成して、ごうかして基礎教育を完ふする、本質教育に導く、ことに努力しなくてはならないと私は思ふのであります。

5、結語

私はこれでお話をやめやうと思ひますが、實は此のペスタロッチーの外、フイヒテの教育論、並にナトルプの社會的理想主義なども、もう少しお話して、私のこの考へが決して、私自身の一家言ではなくて、既にペスタロッチーの如き、またフイヒテ、ナトルプの如き先覺もこの邊の消息を曾つて吾々に教へたといふ歷史的な考査をも致さうと思つて參つたのでありますが、それは省略して他日の問題にしたいと思ひます。――以上私の現代の世相といふものを眺めながら、吾々は教育といふものを如何なる方向に進めて行かなければならないかといふにことついて、近年考へてをることの一端を皆さんの御參考までにお話申上げたわけであります。

――〔完〕――

ロングフエローの詩

立石甫水

左の一篇はわたくしが青年時代――多分第一高等學校在學中であつたと思ふ――に、ロングフェローの有名なる A psalw of Life といふ詩を自譯して、オマケに大贈にも註のようなのさへも付け加へて、ヒトリよがりに悦んで居つたのであるが、此頃本箱の古い書類のなかにはからすも見つけて一種の感慨なきを得ない。思ひうかべたまゝに――。

（七、六、二〇）

人生の詩

眠れる精神はこれ死なり
現はるゝ象は物の眞相にあらず
されば徒らに憂愁悲哀の言葉を以て
「生活はたゞ一場の空しき夢にすぎず」
といふを止めよ。
われらの心、睡魔のおそふところとなつて醒めず、すこしの活氣もないときは、

其肉體は生理作用をつゞけるのみ、死と何等異ることはない。森羅萬象形あり
と雖も、其皮相は常に眞相と一致せず、表裏内外の相違がある。人も亦形に表
はるゝ肉體と其内に活動する精神とを有つて居る厭世家は此世に於ける生活を
空しき夢幻にすぎずと念ずれども決してそうではない。

生存は現實なり、生活は眞實なり
墳墓は生活の目標にはあらず
かの
「汝塵より成るもの又塵にかえるべし」
と云ふは
精神を指していへるにはあらざるなり
生活は夢ではない。現實である確實である。肉體を埋葬する墳墓は吾等の生活
の終局の場所ではない。肉體はたとへ土と化するも精神は墓の中に埋めらるゝ
ものではない。
吾人が天の命を受けて進むべき途は
快樂にもあらず、憂愁人にもあらず
たゞ働きて

毎に今日よりも勝る明日を得んこと是なり
われ等の天職は快樂を求め安逸に耽ることではない。さればとて亦常に憂愁悲
哀のうちに彷徨ふことでもない。倦まず怠らず堅忍不拔の精神をはたらかして
日新月歩に專念することである。

事業は永し、時は馳す
われらの心臓は如何に强健にして勇壯なるも
恰も被へる鼓の如く打ちつゞけつゝ、
葬儀は墓にむかうて進むなり

吾等は天命を受けて其目的に向つて進まんとするも、事業は短き時の間には成
就せず、しかも光陰人を俟たず、白駒隙を過ぐる勢で疾驅する。日暮れて途遠
しである。肉體の活動源泉たる心臓は如何に頑健强壯であつても、一時の休息
もなく絶えず胸腔にあつて死の旅路の鼓を打ちつゞけ、一打一打一日一日と葬
儀は墓に向つて進行をつゞけてゐるのである。さればみだりに肉體の死を彼是
いふのは愚の極である。

地上の廣き戰場に於て
生活の露營に於て

啞者の如くにある勿れ
牽かるゝ牛の如くにある勿れ
先を爭ひて競爭場裡の勇者たれ

地上到るところとして、生存奮鬪の戰場たらざるはなしである。生活は常に露
營の下にあるのである。此戰場たる此露營で、人に先んじて奮進し勇者たるこ
とを期すべきである機先を制すべきである。啞者の樣に默々として、人の言に
のみ服從すべきにも非ず、牛の樣に牽かるゝ儘に動作すべきでもない。

いかに樂しかるべきも未來を信ずる勿れ！
死せる過去には其死を葬らしめよ！
はたらけ！　心を茲に
神をいたゞきて
生ける現在に於てはたらけ！

如何に未來に樂しかるべきことがあると思ふても、未來は未來である。未だ來
ざるとき、之れを信ずるは愚であり、また失敗の因である。過去は過去として
逝かしめよ。徒らに過去を追想して心を惱ますべきてはない。死兒の齡を計へ
ても今更何の役にも立たないのである。ひたすらに我心を現在におきて、見て
視、聞いて聽き得る樣、恒に心を保ち天命を奉じて、誠心誠意其日々々の仕事

をはたらき、積み積りて遂に大業成就の彼岸に到達すべきである。

偉人の生涯はみな吾人をして奮起せしむ
吾人も亦其生活を崇高ならしめ能ふなり
而して死の其後に
其時の砂上に足跡を遺さむ

偉人傑士は多し、されど彼等はみな死にはてたり、されど尙其生涯は我等によりて想ひ起されるのである。彼等は死んでは居ないのである。我等も亦人である天職を守りて奮勵せば彼等と等しく偉大なる生涯を完ふすることが出來る。そして死後我等の言行は、時人の口により筆によりて、砂上に印したる足跡の樣に後世に傳はり得るのである。

酷烈なる生活の大洋を航し
艱難に遭ひて舟を失ひたる我等の友は
足跡を見て再び其勇氣を快復せむ

波荒き世間の海を航行し雨と風とになやまされ、暗礁に觸れて其舟を失ひ、轉々浪に漂ふて辛くも彼岸にたどり着きたれど、不知案内、只茫然として停み、殆んど失神せんとする。かゝる時後世の人々もし砂上に我等の足跡のあることを見付けたならば復び勇を鼓して、其跡を進むであらふ。

されば吾人は
奮起してはたらき
如何なる運命に吾はありとも
心を放たず、成功を期し、業に從ひ
働くを知り、俟つを知らざるべからざるなり

我等の肉體は遂に墳土と化し去るべきも、其精神は永劫消ゆることなきものである。そして後世の人心を指導することが出來るのである。されば我生活を高揚し、眞善美の彼岸に到達し得るの足跡を遺しおくことが我等の責務である奮ひ立ちて業に從ひ、地位に堪え忍び、常に緊張して放心することなく、將來の成功を期して進んで止まず、大に後世子孫に俟つところあるべきである。

跋

長田新先生は、御多忙中をわざ〳〵御來名下さいました。そして本會の此擧を御贊成下さつた名古屋市校長會は、町田會長はじめ熱心に御後援下さいました。それは全く記錄を破つたことの由、私達もどんなに感謝したか知れませんでした。

その日七月二日が近年にない豪雨の日でありましたにもかゝはらず、長田先生を待つ人々の心と、敎育の一事を思ふその熱心と、御後援下さつた方達の御盡力とこれら相俟つて、豪雨中大盛會を極め八重の講堂においての珍らしいものとされました。

それにつけても、本會々員の諸子もまたよく骨を吝まず、幾ケ月の以前よりのことは姑く問はずとするも、此日待ちに待つた先生のお話をぞうしても充分聽き得なかつたもの二十名に及んだ此一事に依つてもそれは知られます。私達はまことに感謝にたえません。……その日の參會者七百名、今またその速記を四方の聲に動されて印行する。小さい乍らの敎育の運動に參加し得て思へば感激にたえません。

なほ、立石先生及びロングフエローについて一言いたします。立石先生は人も知る如く我司法界の先覺者として全國に盛名あるお方、申上げるまでもありません。ロングフエローは、英詩人中の最大なるもの、一人、その優麗典雅なる風韻のうちに、高き道義の觀念を藏するもの、數ある英詩人中尤なるものであります。一般詩を愛好するひと達が、多く美辭麗句、感傷的或は奇矯

なる感情を對象とするに反して、ロングフエローは些か趣きを異にし、爲めに日本にその譯書も他のものに比して少ないのでありますが、しかし私達は、いはゆる享樂主義が、その享樂をなすこと反つて少なく道義の世界、宗教の境地に、それを味ふとより多きの故に——と、つねに考ふると同じ意味において、このロングフエローを此上なく愛するものであります。ワシントン、リンカンを遠ざかり、エマースンやホイツトマンを拒けつゝある現在の米國を見て、思ひ半ばにすぐるものあると存じます。

最後に、長田新先生に深く感謝を捧げ、外御後援御盡力を賜つた諸先生にあつく御禮申上げておきます。

また、本書の文章は、そのときは柳生尊兄の手にして、拙なる責めは三宅之を受く可きもの、こゝに責任を明かにして予てお詫び申上げます。

昭和七年八月廿五日

三宅直一郎

昭和七年九月一日印刷
昭和七年九月五日發行

現代世相と國民教育の根本義

頒價貳拾錢

著者　長田新

發行者　三宅直一郎
名古屋市東區下飯田町一一八八番地

印刷所　地上社印刷所
名古屋市中區常盤町三三番地

發行所　名古屋文教協會
名古屋市東區下飯田町一一八八番地

振替　名古屋一二二九九番